二松学舎大学附属図書館
季報
No.122
2025（令和7）年7月

コンテンツ紹介

p.2 柏キャンパスの魅力と図書館と……
文学部国文学科　専任講師　長谷川 豊輝

p.3 少年の日の思い出
国際政治経済学部国際経営学科　准教授　藤井 宏次

p.4 熱海文学散歩

p.6 文書だけじゃない！音の資料を聞いてみよう
国立国会図書館「歴史的音源」

p.7 本学所蔵資料紹介　三島中洲書幅
作家のおやつ⑪

p.8 本学教職員著書紹介
『孝経：儒教の歴史二千年の旅』
文学部国際日本・中国学科　教授　橋本 秀美

九段
館内企画展示「図書館にあります！レポート作成のコツ」

柏
館内企画展示「2025年度生涯学習講座（春）」

柏キャンパスの魅力と図書館と……

文学部国文学科　専任講師　長谷川 豊輝

私の学生時代（博士後期課程）は新型感染症の流行と重なっている。当時は世の中が完全に自粛ムードであり、様々な制約を受けた新しい生活様式・社会の形への移行を余儀なくされることとなった。

気軽に大学に行くことができない状況は、日本文学を学んでいた私にとって大きな問題であった。本を手に取って眺めることができないのである。様々な方の尽力によりゼミや学会という発表の場はなんとか維持されていたものの、肝心の発表対象が取り上げられてしまったような感覚であった。（ちなみに新型感染症流行以降はじめて対面での研究発表が叶ったのが、二松学舎大学で開催された日本文学協会第 40 回研究発表大会であった。（その説は大変お世話になりました。））

こうした状況の中でお世話になったのが二松学舎大学附属図書館（柏）である。今回は柏キャンパスの紹介も兼ねて附属図書館（柏）の魅力を綴ってみたい。

「二松柏の国語がすごいらしい……。」

そんな噂を耳にした私は、二松学舎大学附属柏中学校・高等学校に非常勤講師としてお世話になることとなった。少し脱線して両校の魅力（の一部）を紹介すると、次の 2 点を特徴として挙げることができよう。

・地域に密着した学び
・論語の学習

前者は、地元の方々の要請という形で附属柏高等学校が開校した経緯と関わっている。両校は手賀沼に隣接しており、地域の人々・歴史・環境を通じた学びが展開されている。地域に根差した学びを深めていくことで世界に通じる力を育んでいくという、Think globally, act locally を体現した学びが両校の魅力の一つである。

後者については、『論語』による人間力の向上が挙げられる。重要なのは、『論語』を学ぶことと同時に『論語』で学ぶことも試みられている点である。「論語」の授業は本文の素読・暗唱からスタートするが、読み取りを通じた国語力の向上、他者との交流を通じたコミュニケーション力の醸成、英訳を通じた英語力の向上・異文化理解等々も同時に身につけることができるのである。

こうした学びを支えているのが附属図書館（柏）である。附属図書館（柏）は 15 万冊以上の蔵書・約 3000 種の雑誌・約 3000 タイトルの視聴覚資料を誇る本学の知の拠点である。

奈良時代の歴史書・地方誌を専門とする私にとって附属図書館の規模は非常に魅力的であるが、それ以上に良い点として分野横断型の自由な閲覧環境とレファレンスシステムが挙げられる。

奈良時代の文献（神話・伝承など）は漢文で記されており、漢籍や辞典を参照しつつよんでいく必要がある。大学図書館では教室（＝学問分野）単位で本を揃えていることが多く、分野を超えての閲覧に手間がかかる場合がある（タコつぼ化の弊害であろう）。附属図書館（柏）では自由に本を手に取ることができ、既存の枠組みを超えた読書体験・研究活動が可能である。なお、分野の枠組みを超えた風通しの良さは教員間にも当てはまり、様々な共同研究プロジェクトが進行中である。

調べ物をする時に何から手をつけて良いのか分からず途方に暮れることもままある。そんな時に頼りになるのがレファレンスシステムである。レファレンスとは、利用者の希望に対して様々な提案を行うサービスであるが、附属図書館（柏）の方々は寄り添って並走してくださるような安心・信頼感のある対応をしてくださる。これも大きな魅力である（発表前・論文投稿前にいつもお世話になっております）。附属図書館（柏）は「国漢の二松学舎」としての伝統の蓄積と二松学舎の良さが凝縮された知の拠点であるといえよう。

「大学」という空間は「3 密」（密閉空間・密集場所・密接場面）にこそ価値を見出してきたように思われる。様々な背景を有する人々が集まり、ゆるやかな関係性で自由につながることのできる場。伝統と革新性を有する二松学舎の魅力の一つとして、ぜひ附属図書館（柏）を利用してみていただきたい。

少年の日の思い出

国際政治経済学部国際経営学科　准教授　藤井 宏次

山と海が近い地方の小さい町には、蝶だけではなくて、季節には無数のホタルが見事に飛び交っていた。一方で、家から自転車で出かける範囲に本屋さんは無かった。そんな町出身の僕の本に関係する記憶を少し辿ってみる。

読書の真似事としては、小学校の始業日に教科書を受け取って帰宅すると、「国語」に載っている物語や小説を全部読んだことを思い出す。また、気づいたときには家のスチール製本棚に「世界童話全集」などがあり、退屈なときに読んでしまった。そして、学校から推薦図書購入の案内が配布されたときには、ホームズやルパンのような少年物を選んで買ってもらった。それでも、男子小学生にとって図書室は掃除当番のときと読書感想文用の本を探すときにだけ行く場所だった。そんなある日、同級生の女子たちが地区の公民館で面白い本を借りているらしいという。大人が行く公民館には気後れしていたが、自分も下校途中にこっそりと訪れてみた。公民館の奥の狭い書庫に本がたくさん並んでいるのを見て、日頃は建築や稲作の作業をしているような大人たちが本を借りて読むということに何かズレを感じた。そのときに自分が借りた本は覚えていない。

中学に入って話題になったのは「ノストラダムスの大予言」というちょっと古いシリーズ本で、図書室で借りて読んでみると「1999 年 7 の月に恐怖の大王が降りてくる」という。人類滅亡の予言に不安を掻き立てられたことはご多分に漏れない。また、「頭の体操」というクイズ本のシリーズもあり、独特の挿絵も含めて愉しんだ。なぜこの手の本が中学図書室に備えてあったのかと今では不思議な気がする。同じ図書室で「古事記」を手にとって、国生みの逸話を中学生的な感性のままで読んでしまったことも気恥ずかしく思い出される。

兄が買ってきた『変身』（カフカ）や、国語教師が何故か僕に推薦してきた『異邦人』（カミュ）を読んだのも中学だった。「あとがき」には翻訳者による解説が付いていることが多いが、そこには「不条理」云々と中学生には実感できない言葉が並んでいるばかりで、これらの読書は「？」が残るだけの苦しいものだった。背伸び読書をした思い出である。

バス通学だった高校の土曜日の部活帰りは、バスを 1 時間以上待つことが度々あった。そんなときには本屋でブルーバックス（講談社）を立ち読みした。自然科学系の専門家が一般向けに分かりやすく書き下ろした解説シリーズだ。買うことは滅多に無かったが、店主に怒られることも無かった。この習慣との前後関係は忘れたが、何気なく観ていたテレビ番組が、光の速さがずっと遅くなった仮想世界の不思議な話を紹介していた。動く車からみると、ビルが縮んだり壁の陰側が見えたりするという。今思えば、ガモフという人の書いた『不思議の国のトムキンス』という本が下敷きなのだろうが、当時は何も知らない無垢な高校生である。「知りたい！」と思い立ち、町の 2 軒の本屋さんを部活帰りに巡ってみた。嗚呼、田舎町かな、棚に並んでいるのは週刊誌や受験参考書、旅行ガイドなど「売れる本」であり、専門書はもとより一般啓蒙書もない。大きな街だったら！と僕は嘆いた。

諦めきれない僕は、基本に戻って高校の図書室に行ってみた。こちらも小説や全集、辞典などが棚を占めている。が、そんな中、黄色の薄い本の岩波新書シリーズを見つけた。その一冊がなんと『空間と時間の数学』（田村二郎）というではないか！早速借り出して自宅で開いてみた。ピタゴラスの定理と（距離）÷（時間）＝（速さ）くらいの知識を使って平易に説明してあり、紙と鉛筆を持って読み進んだ。さすがに読了した記憶はないが、それは町の高校生と相対性理論との遭遇だった。その後、大学進学とともに大きな書店や古本屋がある街での生活となり、爾来本捜しで特に困ったことはない。

現在は、ネット通販のおかげで書籍入手の地域格差が解消される傾向がある一方、今度は本屋さん実店舗の存続が危うい！図書館や地域の本屋さんは、自分の知らない楽しい本や謎めいた本を手に取って見られる大切な場所である。二松学舎からちょっと先の神田の古本屋さんでは、思いがけない未知との遭遇があなたを待っているかもしれない。

熱海文学散歩

古くから保養地として知られる熱海は、都心から近いこともあり、多くの文豪が愛した街でした。今号では熱海にある文学史跡や彼らが通っていた店舗を紹介します。

熱海駅から商店街を抜けた先にある旅館「湯宿一番地」の正面玄関前に、尾崎紅葉（1867 ～ 1903）が生前に愛用していた筆を祀った筆塚と「暗しとは柳に浮き名あさみどり」と刻まれた句碑①があります。紅葉は小説家だけでなく俳諧師としても活躍し、縁山・戯作堂・半可通人などの号を使用していました。句碑に刻まれた文字は、紅葉が遺族に残した自筆の掛軸から写しとったものです。

海岸方面へ向かうと、紅葉の代表作『金色夜叉』の一場面を再現した「貫一・お宮の像」②があります。熱海を舞台に主人公の貫一と許嫁のお宮の悲恋を描いた『金色夜叉』は 1897 年～ 1902 年の 6 年間にわたって『読売新聞』に連載され、昭和に入ってからも何度も映像化されたことで熱海は一躍脚光を浴び、観光都市へと発展しました。2019 年には像の隣に記念碑も建てられました。また、銅像のすぐ隣には立派な松の木が生えています。もともと「羽衣の松」という名前でしたが、紅葉の弟子で『金色夜叉・終編』を書いた小栗風葉（1875 ～ 1926）の金色夜叉の句碑「宮に似たうしろ姿や春の月」が傍らに建立された後、いつしか「お宮の松」③と呼ばれるようになったそうです。

西へ向かうと、谷崎潤一郎（1886 ～ 1965）や志賀直哉（1883 ～ 1971）が足繁く通ったという老舗洋食店「スコット」④があります。志賀はここのビーフシチューを気に入っていたようです。また、熱海銀座商店街にある喫茶店「ボンネット」⑤は三島由紀夫（1925 ～ 1970）が常連で、三島はハンバーガーを好んで食していたそうです。

シェイクスピアの翻訳でも知られる作家の坪内逍遥（1859 ～ 1935）は、病気療養の長兄に付き添って 1879 年に初めて熱海を訪れたのを機に、たびたび熱海を訪れるようになります。そして 1912 年 1 月には糸川沿いに別荘を構えて居住し、別荘があった近辺に「ちかき山ゆきはふれれど常春日あたみのさとにゆげたちわたる」の歌碑⑥があります。

その先には、1919 年に別荘として建てられた「起雲閣」⑦があります。「起雲閣」は 1947 年に旅館として生まれ変わり、山本有三（1887 ～ 1974）、太宰治（1909 ～ 1948）、舟橋聖一（1904 ～ 1976）などが投宿しました。2000 年には熱海市の所有となって一般にも公開され、日本の伝統的な建築様式の残る本館と離れ、外国の様式が融合された独特な洋館に、緑豊かな庭園などを楽しむことができます。太宰は『人間失格』を別館で執筆し、本館二階にある「大鳳の間」⑧は入水心中の 3 カ月前に愛人の山崎富栄と宿泊しています。

来宮駅へ向かう途中にある海蔵寺には「逍遥坪内雄蔵夫妻墓」⑨があり、熱海を

愛した逍遥が駿河湾を一望できる高台でセン夫人と共に静かに眠っています。

さらに進むと、逍遥の終の棲家「双柿舎」⑩があります。逍遥は観光地と化して賑やかになった熱海中心街の喧騒から逃れるため、1919 年にこの地へと移り住み、1935 年に亡くなるまでの 15 年間を過ごしました。庭も建物も逍遥の設計によるもので、「双柿舎」の由来となった 2 本の柿を愛した逍遥は「吾なきのち千歳を生きて世のむかし里のむかしを語れ老い柿」という歌を詠んでいます。また、1928 年に完成した「逍遙書屋」⑪は、和漢洋を折衷した印象的な景観で逍遥苦心の作と言われています。

来宮駅を過ぎると、来宮神社があります。境内には国文学者で『万葉集』の研究者として優れた業績を残した佐佐木信綱（1872 ～ 1963）の歌碑「来の宮は樹齢二千年の樟のもとに御国のさかえいのりまつらく」⑫があります。また、大楠⑬は逍遥が戯曲『役の行者』のイメージ作りに用いたそうです。さらに北に進むと、信綱の旧居である「凌寒荘」⑭があります。信綱は病後の静養の地として 1944 年に温暖な熱海に居を構え、晩年を過ごしました。生垣には信綱の歌碑「願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとはばや」⑮があります。

坂が多い熱海の散策で疲れた後は、温泉と食事でゆっくり体を癒しましょう。

文書だけじゃない！音の資料を聞いてみよう

国立国会図書館「歴史的音源（れきおん）」

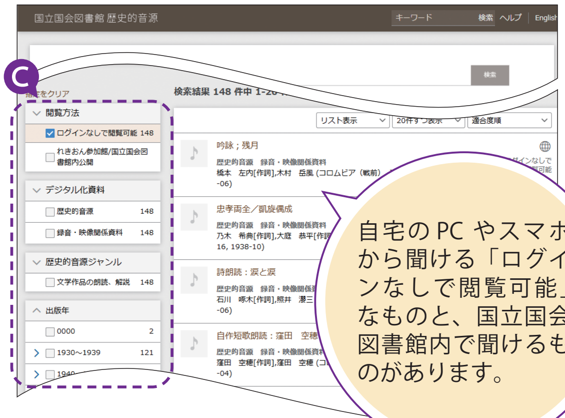
https://rekion.dl.ndl.go.jp/

どんな資料がある？

1900～1950年頃のSP盤等のデジタル化音源を収録しており、邦楽、演説、朗読、落語といったジャンル別に音源を探せます。一部の資料は、自宅のPCやスマホからでも聞くことができます。その他、「テーマ別音源紹介」コーナーでは、収録音の時代背景などが紹介されています。

例えばこんな音が聞けます

演　説	犬養毅（内閣総理大臣） 新内閣の責務（上）（下）1932年2月
朗　読	坪内逍遥 ハムレット（生死疑問独白の場）（一）～（四） 1933年11月
歌舞伎劇	市川左團次 他 番町皿屋敷（青山播磨宅の場）（上）（下） 1924年6月



自宅のPCやスマホから聞ける「ログインなしで閲覧可能」なものと、国立国会図書館内で聞けるものがあります。

資料の探し方

A キーワードで検索する
人物名、作品名などをキーワードボックスに入力して検索できます。

B ジャンルで探す
「落語」「講義、講演、演説」など目当てのジャンルのボタンを選択するだけで簡単に検索できます。

C 検索結果が多すぎるときは絞り込み機能を使う
検索結果の一覧画面で、「ログインなしで閲覧可能」や、出版年など条件を追加して絞り込むことができます。

探したい人物が決まっているときはこれも便利

電子展示会「近代日本人の肖像」

https://www.ndl.go.jp/portrait/

政治家、官僚、学者、文学者、芸術家など1,000名以上の肖像写真と人物解説、国立国会図書館が所蔵している関連資料（音声、直筆資料など）がまとめられています。人名や職業、出身地などから簡単に検索できます。

例えば「与謝野晶子」を探してみると…

写真と生没年などの情報、「歴史的音源」へのリンクが掲載されています。
リンクから、本人による「短歌朗読」が聞けることが分かります。

画像はすべて国立国会図書館「歴史的音源」「近代日本人の肖像」より

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅

楞厳經十六首　其九　明治二十年

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。

明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。

大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。

儒論現有老論無　儒は現有を論じ　老は無を論ず
釋氏兼無有與無　釈氏は兼ねて無し　有と無と
究竟皆歸勸善術　究竟　皆(みな)帰す　勧善の術
區區三道本來無　区々たる三道　本来無し

儒家は現に存在している物事について説き、老子は無について説いている。それに対して釈尊の教えは、有と無どちらも区別することがない。とどのつまり、帰するところは三家いずれも勧善の教えであり、その点では、まちまちなこの三本の道も、本来分かれていなかったと言えるのだ。

（石川忠久編　『三島中洲詩全釈』第二巻より）

作家のおやつ⑪

谷崎潤一郎（1886 ～ 1965）は 1942 年に熱海ホテルに滞在して以来熱海に魅せられ、同年には別荘を購入してこの地に滞在することが多くなりました。

自らを食魔と称したほどの美食家である谷崎は甘いものも好物で、滞在先の熱海でよく買っていたのが三木製菓の「ネコの舌」という名前のラングドシャクッキーでした。

孫でエッセイストの渡辺たをりは、「三時ごろになるとおやつの時間です。祖父はまた、書斎から出て居間にやってきます。おやつは熱海市内のレストラン「モンブラン」のチーズトースト、洋菓子屋の「三木」のクッキー、ラングドシャ、アイスクリームなどの時もありました・・・」※と書いています。

本店以外にも、熱海駅の売店でも買えますので、旅のお土産にいかがでしょうか。

（三木製菓の場所は p.5 の地図を参照してください。）

※『花は桜魚は鯛　谷崎潤一郎の食と美』渡辺たをり著　ノラブックス　1985 年刊

本学教職員著書紹介

『孝経：儒教の歴史二千年の旅』

橋本 秀美 著
（岩波書店、2025 年 1 月刊行）
新書判　244 ページ　960 円＋税
ISBN 978-4-00-432050-0

二松学舎は漢学塾が出発点で、漢学を学校文化の核心としている。しかし現在、漢学は元気が無い。人気も無い。それは、二松学舎だけではなくて、日本全体を見渡しても言えることだ。漢学だけではなくて、文学全体が衰退しつつある。無理も無いと思う。今や、私の専門とする漢学ど真ん中の古典文献研究の領域においてさえ、デジタル資料は欠かせないから、パソコンとネット環境は維持しなければならない。スマホを使わざるを得ない状況も増えてきていて、今年度から二松学舎では出席確認にもスマホが必要になった。パソコンやスマホを使っていれば、読書の時間は当然減ってしまう。次から次へと流れてくる情報に煽られ続け、自分と向き合い、自分を人格としてまとめる時間が減ってしまう。至る所でアカウントやらパスワードやらが必要で、日常的に使っていないと使い方も忘れてしまうから、ひたすらネット上のシステムに対して自己同一性を証明している。一歩では足りない、百歩か万歩退いてみて、その情報の流れの無意味さと恐ろしさは始めて実感される。

漢学は漢文を読む。ただ漢字だけが並んでいるのが漢文だ。並んでいるけれど、その漢字は決して自分から流れることはない。私たちが頭と心を使って読んでいく時、それらの漢字は始めて意味を持って、活き活きと踊りだす。漢字が躍りだす時、私たちの頭と心も生きてくる。生きる経験の積み重ねが、自分の人格を形成する。

岩波新書『孝経』は、漢学と二松学舎の宣伝になればよいな、と思って書いた。漢学の世界が豊富多彩であることを示したつもりだし、特に意識して書道作品に多く触れるようにした。固有名詞が多いのは辟易されるかもしれないが、一一覚えて頂く必要は無いので、安心して読み進めて欲しい。一つ書きそびれたことを補足しておく。諫諍は、集権君主にとっては大歓迎であった。言いたいことを言わせて、不平分子を特定できれば、適当な理由をつけて処罰して終わりだからだ。

文学部国際日本・中国学科　教授　橋本 秀美

編集後記

「季報」122 号をお届けします。

今号では、教員 2 名の図書館にまつわるお話を紹介しました。

図書館の資料には、音声や映像資料（視聴覚資料）もあります。録音・録画技術が確立した近代以降のものに限られてしまいますが、紙資料だけでは分からない情報が記録されています。図書館を利用するときは、ぜひ AV（視聴覚資料）コーナーも覗いてみてください。ついでに、懐かしい映画や音声に再会するかも…。（Sh）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 122 号

発行日　2025 年 7 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
（九段）　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
（柏）　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ